夜想曲をもう一度

神尾夏希

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
夜想曲をもう一度

【Ｎコード】
Ｎ８０８７Ｗ

【作者名】
神尾夏希

【あらすじ】
少年と少女、二人の芸術家が出会ったのは必然だった。
けれどだからこそ、その別れも必然。
そして、その先にある再会も――

月夜の序曲　―ｏｖｅｒｔｕｒｅ―

部活動の声が聞こえる。穏やかな橙色といった感じだろうか、楽しげな様子だ。窓から差し込む夕日は赤く、日暮れ時の校内はどこか寂しげである。

美術室の鍵を閉め、少年――綾瀬川四季は玄関へと歩き出した。

入学して二ヶ月程だがもうだいぶこの高校にも慣れた。衣替えの終わった学生服は生地が薄く風通しが良くて気持ちが良い。

改築されたばかりで傷の少ない壁面や床を観察しつつ歩いていると、角を曲った所で不意に、夕日色に染まっていた白壁にどこまでも深い蒼色が重なった。

同時、何処からピアノの旋律が響いている事に気付く。

「え……」

まだ太陽が沈んではいない。意識して見れば今も壁は夕日の赤に染まっている事が分かる。

でも耳をすませば見える。

宇宙の色。

濁りの無い深い、けれど透き通るような蒼。

紡がれる音色は切なく、奏者の心中が直に感じられるよう。

淀みない打鍵は正確無比で、そして――その響きは徐々に鮮明になっていく。

音源は音楽室だろう。

廊下にいるにも関わらず、目を閉じればすぐ目前で演奏されているかの如き錯覚を覚える。清かな音が校内へと染み入るように響き渡っていく。

これまで幾度となく聴いてきたピアノの音。それらとは似ているようでまるで違う。

友人、学校の先生。違う。これは単に趣味で弾いている者には出せない音だ。
CDとも違う。
生の演奏だけが持つ音の広がりがある。瞬間を切り取られてしまったものとは異なるピアノ本来の音。
この音は人生を捧げてきた者にしか届かない領域である事は間違いない。
壁に体重を預けて聴き入る。
幾つかの曲が絶え間なく流れ行く。そのほとんどを四季は知っていた。
集中していると各音の細部までよく見え――不意にある事に気付いた。
音色に何かが混ざっている。くすんだような青灰色……靄のかかった夜空のように精彩さが欠けた色。
その原因は分からない。注意しなければ認識できない程に微かな違和。
この奏者の最高の演奏を聴いてみたい。
その色を描いてみたい。
四季はそう思った。
……やがて最後の一音の余韻が消え、曲は終わりを迎えた。
時間にすれば半時程だろうか、いつの間にか落陽し終え、辺りは夕闇に染まっていた。
壁から体を離し、四季は再び歩き出す。

唐突に不協和音が響いた。幾つもの純色がまるで調和する気配なく重層し、醜悪な色となって拡散する。
それは音楽室前へと到着した四季が扉に手を掛けた瞬間、室内のピアノから発せられたものだった。
驚きながらも室内に足を踏み入れる――と、グランドピアノの前に少女の姿があった。握り締められたままの彼女の両手は鍵盤の上

にあり、驚いたように目を丸くしている。
四季は息を呑んだ。
とても綺麗な少女だった。
長い綺麗な黒髪と白い肌が印象的で、かなり細身という事もあって儚げですらある。太陽の下で輝くのではなく、月明かりに映える美しさだ。
「……」
目を合わせたまま沈黙が続く。よく見ると少女の瞳の端には微かに涙が滲んでいた。
少女は四季をじっと見つめ――やがて意を決したように口を開いた。
「あなたは、誰？」
「え？」
そこで四季は自分が硬直していた事に気付いた。慌てたせいか視線が揺らいだ。少女の胸元のリボンが赤い。二年生――先輩のようだ。
「僕は……四季。一年の綾瀬川四季、です」
かろうじて敬語の体裁を保つ。
「先輩は――」
「――あぁ、ごめんね。私は月岡舞夜。綾瀬川君……ね」
月岡舞夜と名乗った少女は形式的な微笑みを浮かべる。
「月岡、舞夜？」
どこかで聞いた覚えがあるような気がするが思い出せない。
「ええ。こんな時間にどうしたの？　ここに何か用？」
その瞬間、四季の鼓動は飛び跳ねた。何のために来たのか、それすらも分からないまま、ここにやってきてしまっていた事に気付く。
だから目を閉じて一度深呼吸。自身の心に問い掛ける。
そしてゆっくりと目を開き、
「あなたに、会いに来ました」
「私に？」

舞夜が僅かに首を傾げると、黒髪が小川のように揺れた。露わになった色白の肌は、頬すらも血色が悪く、いっそ今にも倒れそうに見える。
「はい。さっきの演奏を聴いて、あなたのピアノを――あなたの音をもっと聴いてみたい……そう思いました」
慎重に、丁寧に言葉を選んで発する。
「私の、音？」
舞夜は四季の言葉を戸惑いながら反芻した。
「はい」
「そう……」
舞夜はそこで視線を逸らした。次いでふらつきながら立ち上がり投げやりに呟いた。
「あなたは何も分かってない」

――何が引っ掛かっていたのか分かった。四季は彼女を知っていたのだ。
自室の本棚の横のラックには多くのＣＤが所狭しと並び、その脇には収まり切らないものが重なっている。その中から目標物を探す。
割と目立つ所にあったので数分で見つける事が出来た。
タイトルは『ＮＯＣＴＵＲＮＥＳ』である。綺麗な深蒼色を基調としたジャケットが印象的だ。ケースの端にＤｅｓｉｇｎｅｄ　ｂｙ　Ｓａｙａ　Ｋｉｓｈｉｇａｗａのサインが見える。
このＣＤは月岡舞夜の最初のＣＤだ。発売当時はまだ中学生だという事で結構な話題になった、四季にとっても懐かしい、けれど特別で大切な一枚だ。
プレーヤに入れ、スピーカのコードをヘッドホンに差し替える。
――ゆっくりと夜が始まった。
一音一音が月明かりに照らされた雨粒のように透き通っている。それらは星の瞬きの如く連続し、絡み合い、一つの旋律を奏でていく。調整が為された音は精密で、その重なりは一つの世界を描いて

いた。
僅かな濁りもないその音は、先程聞いたものとは確かに違っている。
迷いも戸惑いも躊躇いもない。微かな陰りも濁りもない、いっそ透明なまでの蒼色。
ただ真摯に――無邪気にピアノに向かっている事が分かる。
……何があったのだろう。
潤んだ瞳、濡れた睫毛を思い出す。
何も分かってない、か……
分かる訳がない。舞夜は何も言わずに去ってしまったのだから。
描いてみれば少しは分かるだろうか。

始まりの緩徐楽章　―ａｄａｇｉｏ―

「あ、おはよう。なんか久しぶりだね」
舞夜が教室に着くと級友が話し掛けてきた。
「まるまる一週間会ってなかったしね。いつもの事と言えばそれまでだけど」
微苦笑して答える。今日は金曜日だ。先週の金曜日は祝日で休み、今週は昨日までオーストリアから来た先生の指導を受けており、舞夜は高校を欠席していた。
「かもねー。あ、そういえば月岡さんって一年生に知り合いいるの？　今週ずっと一年生の男の子が会いに来てたんだけど」
「一年生？　特にいない、と思うけど……」
「そうなの？　もしかしたら月岡さんのファンなのかもね。色々聞いてみたんだけど何も教えてくれなくて。……あーあ、結構いい感じの男の子だったのにさー」
友人は茶化すように笑った。
「まさか」と合わせる様に舞夜も笑う。

「……大丈夫？　なんか顔色悪いよ？」
「そうかな？　実はちょっと寝不足気味かも……」
「そっか、無理しない方が良いよ？」
「ありがと。本当に駄目そうだったら保健室に行くか、帰るかするね」
微笑んで言うと、友人は心配そうな表情のまま頷いた。
窓際にある自身の席に着く。僅かに呼吸が乱れていた。
右手で頭に触れる。最近あまり眠れていないせいか、明らかに感覚が鈍い。意識が安定しない。
薄く溜息を吐いて目を閉じる。
一年生か……、と心中で呟く。
きっと彼だろう。舞夜の音を求めてくれた綾瀬川四季と名乗った少年。
あの日から彼の言葉が頭から離れない。ふとした時に再生されてしまい胸がざわついてしまう。
先生達には聴こえないという舞夜自身の音、舞夜にも分からない舞夜の音。
それを彼は求めた。

放課後になった。
元々勉強は嫌いではなく普段は真面目に授業を受けているのだが、今日は全く集中できなかった。上の空に聞いている内に瞬く間に時間は過ぎていた。
……帰ろう。
急いで荷物をまとめて教室を後にする。朝友人が言っていたように、きっと今日もあの少年――四季がやってくるだろうと考えたからだ。
まだ一度会っただけだが、別に嫌いなタイプではないし苦手という訳でもない。むしろ、久しぶりにピアノが認められ、ほんの少し嬉しかったりもした。

じゃあなぜ？
素直に喜ぶべきなのかもしれないが、舞夜は自身の音が分からない。自分自身が認められないものなんて大した意味は無い、そう思う。
……ううん、それだけじゃない。
最近では、日常を送る上では他人にピアノについて触れられる事はほとんど無くなっていた。だが先日に言われた言葉で、やはりピアノは舞夜自身なのだと思い出してしまったのだ。
……今はそんな現実を見たくない。
片やピアノを褒められて喜び、もう一方では自分にはピアノしかない事を嘆く。
舞夜の心は不安定で考えはぐちゃぐちゃ。確かなものは何もなかった。
生徒の隙間を縫って速足で歩く。少し頭が痛い。
廊下の角を曲って階段を降りていく。一歩二歩三歩。振動が頭に響く。階段の途中で足を止め、目を閉じて壁に寄り掛かりゆっくりと呼吸をする。
かなり疲れているようだ。保健室で休んでいくべきかもしれない。そんな事を考えていると、階下から足音が響いてきた。
「月岡……先輩？」
目を開くと四季の姿が。踵を返して階段を上がろうとする――が急な動作に身体が対応しきれずふらついた。足が上がりきらず、階段に躓いてバランスを崩してしまう。悲鳴を挙げる間もなく身体が背後に傾いていった。
「先輩！」
その声が聞こえたのとほとんど同時、強い衝撃が舞夜を襲い、そこで意識は途絶えた。
「……ん」

四季はゆっくりと意識を取り戻した。初めに認識したのは鼓動に合わせて感じる規則的な頭痛。熱を帯びた痛みだ。
次いで扉の閉まる音が聞こえた。
重い瞼を持ち上げると、辺りには暗闇が満ちていた。硬質な靴音が響き、カチッというスイッチ音と共に蛍光灯が点灯する。視界は天井と白いカーテンに覆われていた。
徐々に意識が覚醒していく。
室内にはピアノの演奏が響いている。CDプレーヤから響いているようだ。この間家で見たのと同じ深い蒼色の旋律、しっとりと心地良い。
身体を包むのは柔らかくて真っ白な布団。四季は保健室のベッドの上にいた。
階段から落ちたんだっけ、と他人事のように思い出す。
身体を起こしてカーテンを開く。するとそこは隣のベッドで、眠っているのは舞夜だった。
幼い――けれど綺麗な寝顔。癖の無い黒髪が無造作に広がっている。
童話の中の眠り姫はこんな感じなのだろうか、としばし見惚れてしまった。
と。
急に反対側のカーテンが開かれる。
「大丈夫？」
「え？　あ、うわっ！」
顔を出したのは養護教諭――御先歩美だった。白衣に身を包みフレームの細い眼鏡をかけている。四季の慌てぶりを見て、その瞳が不思議そうに丸くなった。次いで四季の背後へと視線が移り、
「もしかして、襲っちゃうとこだった？」
「違います！」
思わず声を荒げる。御先はくすりと笑った。
「まぁ、冗談はさておき。あ、えーと……頭、大丈夫？」

「……大丈夫です。まだズキズキとはしますけど」
「そ。階段から落ちて壁に頭をぶつけたみたいだしね、しばらくは痛むと思うけど仕方ないかな。こぶにもなっちゃってるし。気持ちが悪かったり、吐き気がしたりは？」
「特には」
「ならよかった。たぶん大丈夫だと思うけど、帰ったら御両親に頭を打った事は伝えておいてね。何かあったすぐに病院へ、ってことも」
「分かりました。……あの」
「はい？」
御先は小さく首を傾げる。
「月岡先輩は……大丈夫なんですか？」
「私は大丈夫」
「え？」
驚いて振り返ると、いつの間にか舞夜の目は開いていた。
「……起きてたんですか？」
舞夜は小さく頷く。僅かに顔色が良くなっている気がした。
「あなたがクッションになってくれたおかげでこの子は無傷よ。今まで眠っていたのは……疲れていたの？　もしかして最近また寝不足だった？」
どこか親しげな優しい質問に舞夜は弱々しく微笑んだ。
「……そんなとこです」
次いで「ん」という短い声と共に身体を起こした。四季に向き直り、頭を下げる。
「綾瀬川くん。すみませんでした」
深い深いお辞儀。それは逆に心の距離を感じさせ、二人の間の壁を認識させる。だから四季はできる限り軽い口調で答える。
「全然大丈夫なんで気にしないでください」
「でも……」
舞夜はあまり納得いかない様子だ。

「どうでもいいけど、もう七時よ？　あなたはもう帰った方が良いんじゃない？」
御先は四季に言う。そしてぼそりと続ける。
「まぁ、私が帰りたい、ってのもあるんだけど」
「……」
「車があれば送ってあげたいところだけどねー、私は徒歩通勤だから」
御先は、ごめんね、と可愛らしく片目を閉じる。
「いえ、大丈夫ですよ」
「親御さん、それかタクシーとか呼んだ方が良いかな？」
「大丈夫ですって」
「でも頭打ってるし、一人ってのはねー」
御先は、うーむ、と考え込む。
「あの……」
「うん、舞夜さん。あなたが送っていってあげなさい」

家の方角が同じという事で、途中まで舞夜が四季を送っていく事になった。
四季が教室へと荷物を取りに戻っているため、保健室内には舞夜と御先の二人だけだ。
御先は自身の荷物をまとめたり、窓の鍵を確認したりしている。
ピアノ曲はまだ続いている。これは舞夜が初めて出したＣＤに収録されているものだ。
まだ幸せを確信していた頃の演奏。技術的には多少拙くても、一粒一粒の音が氷晶みたいに透き通っていて、それらの重なりは澄んだ旋律を形成している。
……どこで変わってしまったのだろう。
「舞夜さん、最近何かあったの？」
姉が妹を気遣うかのように優しい問い。クラシックを嗜む御先は

入学当初から舞夜の事を知っており、体調を崩しがちな舞夜が何度も世話になっている内に親しくなったのだ。
「昨日まで先生が来ていて、指導を受けていました」
「そう……。でもそれはいつもの事でしょ？　他にも何かあったんじゃないの？」
「……」
御先は諦めたように溜息を一つ、そして話題を変えた。
「あの子、名前は？」
「綾瀬川四季、くん」
「綾瀬川くん、ね。綾瀬川？　四季……。確か――」
「確か？」
「優ちゃんが言ってたの。今年はなんか凄い子が入部してきたって」
「優ちゃん？　入部？」
舞夜は首を傾げる。
「あぁ、優ちゃんってのは美術の先生。美術部の顧問もしてるの。それで高校時代からの私の友達。――彼女が言ってたのよ、『コンクールに出展してるだけじゃなくて、あの子はもう仕事を受けてるみたいなの』って」
「仕事……」
「何をしてるかは分からないんだけどね。……綾瀬川、四季、か……ん？」
何かに気付いたように動きを止める御先。
「どうかしたんですか？」
「え？　あぁ、いえ別に。何でもないわよ。――話を戻すけど、あなたの寝不足にはあの子が関係していたりしない？」
この鋭さは何なのだろう、と吐息を漏らす。
「少しだけ」
「そう」
御先は優しく微笑む。舞夜が返答に込めた『それ以上は聞かないで』という想いを酌み取ってくれたらしい。御先はプレーヤを停止

してCDを取りだした。ケースにしまい、それを見つめる。舞夜の視線も自然と惹き付けられ、
「その頃は楽しかった……」
不意に弱音が零れた。コンクールで入賞して、両親に褒められて、初めてのCDを出して——ジャケットのデザインが舞夜の演奏そのものみたいで、すごく嬉しかった。
「綺麗よね……」
そう呟いて御先はCDを見つめる。夜の海みたいに穏やかで深い青色を基調とした静かで穏やかなデザインである。それは今の舞夜の心中とはまるで違う。
「今の私の心はぐちゃぐちゃで、何が何だか分からない。本当の気持ちがどうなのか——ピアノが好きなのかさえも分からない」
声が震えた。少しでも気を抜いたら泣きだしそうだ。
「舞夜さん。アナグラムって知ってる？」
御先は唐突に言った。見ると、どこか悪戯っぽい笑みを浮かべている。
舞夜は頷く。アナグラム——ランダムな文字を並べ替えて意味のある言葉にする事だ。
「人の心も一緒でぐちゃぐちゃになっているものも入れ替えたりしてあげれば、綺麗にすっきりするかもしれない。確かな意味も、大切な理由も見つかるかもしれない」
わけが分からない。
「こんな軽く言うのはどうかとも思うけど、あなたは一度ピアノから離れてみるべきかもしれない。自分の中の優先順位を入れ替えてみたらどう？」
一年以上の付き合いの中でピアノから離れろ、などというアドバイスは初めてだった。
舞夜は少し驚いてしまい反応できない。御先は言葉を継ぐ。
「私にはあなたの隣に居る力も資格もないけど、もしかしたら意外と近くにふさわしい人がいるかもね」

御先は微笑んだ。
「あなたは――」

舞夜は四季と並んで歩いていく。この辺りは学区制があり、ほとんどの生徒は徒歩か自転車で登校しているのだが、その例に漏れず二人も徒歩通学だった。
「本当にすみませんでした」
舞夜が謝ると、四季は困ったような顔になった。
「もういいですよ。そんなに謝られるような事じゃないですし」
「でも……」
「でもじゃないです。それに、出来るなら『すみません』よりも『ありがとう』の方が良いです」
「……うん。ありがとう」
舞夜は微笑むと、四季も笑い返してくる。
「御先先生とは親しいんですか？」
「……比較的、ね」
「先輩のCDも持ってるみたいでしたしね」
何気ない言葉に――しかし、どう返事をして良いか分からなくて黙り込んでしまう。
まだピアノを心の底から楽しんで弾いていた頃の一枚。舞夜と同じく中学生らしい貴志川沙耶という少女にジャケットデザインを担当して貰ったCDを手にした時、本当に嬉しかった事を覚えている。
「私の事、知ってたの？」
「はい」
「……今はインターネットがあるしね」
視線を逸らす。前方を見ると信号があった。あの信号を渡ればもうお別れである。
「先輩」
その言葉は一瞬の沈黙の後に発せられた。
「僕は先輩のピアノが好きです」

舞夜は立ち止まる。
「あなたも『ピアノ』なのね」

その冷たい響きは責める様でいて、けれど四季を傷付けるのではなく舞夜自身を切り裂いているように聞こえた。
四季は自分が失敗した事を悟った。今の言葉は舞夜を傷付けてしまったのだ。
四季は理解した。彼女の音楽――ピアノが求められる事が、舞夜にはたまらなく苦しいのだと。
『あなたも』
きっと以前にも似たような出来事があったのだろう。
先日、少し調べてみると、世界的な音楽家の両親を持つ舞夜は『天才美少女ピアニスト』『氷の指先』『硝子のタッチ』と称される、ピアノ界ではちょっとした有名人だった。
若干十歳で『若い音楽家のためのチャイコフスキー国際コンクール』ピアノ部門2位となり、フランツ・リストの作曲した超絶技巧練習曲第2稿さえも弾きこなせると言われた神懸かり的な運指はリストの再来と讃えられた。
その将来を嘱望され、大きな期待を一身に受けてきた少女。
触れれば壊れてしまいそうに細い肩、その小さな背中にどれだけ多くのものを背負ってきたのだろうか。心無い批評や中傷も数多くあっただろう。身勝手な期待と失望に翻弄された事もあったかもしれない。
舞夜を見つめる。
失望したような、諦めたような微笑み。
四季はその想いを知っていた。才能が自分自身を呑み込み、一個の人格として認められない辛さを経験していた。
それでも四季には自身を認めてくれる人がいた。家族は四季を見てくれた。だから今までやってこれた。

舞夜はどうなのだろう。
もしかしたら舞夜には誰もいないのかもしれない。
ピアノを介してしか、舞夜は世界と繋がっていないのかもしれない。
それは酷く不器用な生き方だ。
何かに特化し、それ以外を切り捨てる。
たった一つに全てを捧げるという事は、それが無くなれば自身も無くなってしまうという事。そんな道を彼女は独りで歩いているのかもしれない。
でも。
……その道を信じていられればまだ良い。絶対に正しい生き方は無いが、その生き方は間違ってはいないのだから。
けれど――もしも疑ってしまったら？
自分の選んだ道が誤りだったのではないかと考えてしまったら？
その先はいきなりに暗闇に満ちてしまう。
そして舞夜は今その暗闇の中にいるのだろう。
誰にも頼れず、崩れそうになりながらも独りで立ち、かろうじて歩いているのだろう。
哀しげな瞳の奥に、助けてという悲鳴が聞こえる気がした。
先程、下校する直前に御先に言われた言葉を思い出す。

「――あなた達は似てる。本当に、色々な所がそっくり」
御先は舞夜に聞こえないように四季に耳打ちした。
「……それに、あなたたちは互いに初めてのパートナーだった。――そうでしょう？　だから、あの子をお願い。あなた達の場所は私達にとってはとても遠い所だから」

御先は何を知っているのだろう？
四季のもう一つの顔、これまでの四季を知っているのだろうか。
――いや、そんな事よりも。

……もう、間違う訳にはいかない。
次の言葉を間違えてしまう訳にはいかない。
そして、長い沈黙の末に発せられたのは、
「――先輩。今から、あなたの時間をください」

当たり前の練習曲　―ｅｔｕｄｅ―

次の日曜日、舞夜は市内の県立美術館の前にいた。
……私が、デートか。
舞夜は他人事のように感嘆した。少し前までは想像すらできなかったこの現状に、驚きを通り越してただただ感心するしかない。
先日、四季からまるでプロポーズのような言葉を掛けられ、あたふたしているうちに二人で美術館に行くという約束が取り付けられてしまったのだ。
約束の時間まではまだ少しある。垂直に降る細い雨の先には四季の姿は見られない。
どうしてこうなったんだろ……、と小首を傾げ、昨日までを思い出す。

あの日、保健室で四季が来るのを待っている時、御先は言った。
「――あなたは少し、綾瀬川くんと一緒にいるべきかもしれない」
「え？」
「あなた達は似てる。それぞれが互いの鏡みたいに。ほんのちょっと違っていたら、あの子はきっとあなたになっていて、何かが違っていたらあなたはきっとあの子みたいになっていた」
「そんなこと――」
舞夜が否定しようとすると御先は首を振って制した。
「それに――」

――その先が告げられる事は無かった。その後すぐに四季がやって来て、二人は帰宅する事になったからである。
帰宅してからはすぐに眠ってしまった。色々と……本当に色々と疲れていたのだろう。結局その日は、何年かぶりにピアノを演奏する事無く終わった。
その翌日――昨日。
朝食を摂りながら前日の事を振り返っていると、四季との約束を思い出した。そして、よく考えればそれはデートと呼ばれるものなのではないか、という事に思い当たった。
ただでさえこれまで学校での関係が希薄だった舞夜は、異性はおろか同性の友人とさえ出かけた事が少なかった。
どうしたらいいか分からなくて慌てたが、あまりに専門外過ぎる分野なので何も浮かばず、結局、メールで友人に相談してみた。すると「まずは買い物に行こう」という事になり、急にではあったが午後から外出したのだった。
それは本当に久しぶりの事だった。雨が降ってはいたものの友人との時間は楽しく、友人も楽しかったと言ってくれた。本当は以前から誘いたかったらしいのだが、舞夜の事情を知っていたために憚られたらしい。今回は舞夜の方から連絡があり、嬉しくて飛んできたそうだった。
家に帰り翌日の準備を終えると、慣れない事をしたからだろうか、またも疲れきって眠ってしまった。
ピアノに向かわない舞夜の姿を見て、幼い頃からずっと世話してくれている爺やは心配していたけれど、舞夜自身は不思議と違和感なくそれを受け入れられた。
ピアノに触れ続ける毎日が続き、それは既に生活の一部となっていた。それを無くす事などできないと思っていたが、想像以上に簡単に変えられた事に少々驚く。
何かを変える事は簡単で、何かが変わる事はよくあるのかもしれない。

今までした事の無いような格好の自分を見る。
友人が選んでくれた服。
きっと雨が降るだろうからブーツを、舞夜はすごく女の子っぽいからとライトカラーのワンピースを、それに合わせた可愛らしいバッグを、と半日掛けて選んでくれたのだ。着せては取っ替えて、持たせては引っ替えて、とあちこちの店に引っ張り回されて、山ほど試着した。
……おかしくないかな、と美術館の硝子窓に映る自身の姿をチェックする。
よし、大丈夫。……たぶ――
「――すみません、お待たせしました」
「きゃっ」
背後からいきなりだった。同時に、くすっという笑い声が聞こえた。目を開けると、眼前の硝子に笑いを堪える四季の姿が映っていた。
「……綾瀬川くん、私、帰っていい？」
ムッとしたので振り返りもしない。
「それなら、僕も付いていきますけど？　今日は先輩の時間を貰う、って約束しましたよね？　どこか行きたい所、あるんですか？」
「……」
四季の落ち着きぶりがやけに気に障った。シャツにスラックスという少し大人びたシックな格好をしている。
小さく息を吐いて振り返る。非難するように四季を見やる。
「なんか……生意気。綾瀬川くんってこんな人だったの？」
「本気で怒ったのなら謝ります。――でも、今日は一緒にいてくれませんか？」
瞳に真っ直ぐに見つめられる。笑みを消した真面目な表情。
芝居がかった台詞だな……、と落ち着いているふりをしつつ思う。
数秒ほど視線を交錯させ――舞夜は根負けした。ふっと力を抜いて頬を緩める。

すると四季も満足したように
「行きましょうか」
「綾瀬川くん。……もしかしてあなたって結構せこい？」
失礼な物言いではあるが、舞夜は我慢できずに言ってしまった。
「別にそんな事は無いと思いますけど？　ちょうど父に貰ったチケットがあったから――あるものは使わなきゃ、ですよ」
四季はにっこりと笑う。先程、チケットカウンターに並ぼうとした舞夜を止め、四季は二枚のチケット見せてきた。四季の父親が館長と友人らしく、そのツテで手に入れたとの事だった。
――と、四季は舞夜から視線を外し、ぼそりと言った。
「与えられた者が活用するのは義務ですよ。権利じゃない」
「……いきなり何？」
「なんでもないですよ」

「――レオナルド・ダ・ヴィンチはまさしく『芸術家』と呼ばれるべき人間だった」
最初の展示物の前で四季は言った。
「絵画や彫刻や建築はもちろん土木や科学にまで精通し、そのどれもで目覚ましい業績を残している。あまり好きな言葉じゃないけれど……『天才』だったんだと思う」
視線は作品に向けたまま、舞夜はその言葉を聞いていた。
眼前にある絵画は『受胎告知』だった。普段はフィレンツェの美術館にあるが、この展示会のために借りたらしい。
完璧に遠近法に則って描かれており、写実主義においても文句のつけどころは無い。そういった技巧的な部分を抜いても素晴らしい。美術に疎い舞夜でさえも、ただ感覚のみで理解できた。
「――様々な分野に精通していたからこそ、それぞれの分野で素晴らしい作品を生み出す事が出来たんだと思う」

二時間ほどが経ち、館内を一通り見終えた二人は、館内に併設されているカフェにいた。ケーキセットを注文し、ウエイターが席を離れてから一息吐く。
「――綾瀬川くん、あなたはよく美術館とか来るの？」
展示物の見方、それに対する説明など、四季の立ち居振る舞いは非常にこなれており、似たような事が何度も会ったのだろうという事を想像させた。
「美術館だけじゃなく博物館や水族館、動物園や科学館も行きますよ」
へえ、と舞夜は感嘆する。
「それは……変わってる、のかな？　それとも、普通みんなはそれくらい行くものなの？」
「たぶん、僕はかなり多い方だと思いますよ。僕の場合は、勉強も兼ねてるので」
「勉強？」
「僕は芸術家になります」
「え？」
四季は言い切った。
「芸術家になって、そして――百年先や二百年先、――いえ、その先にまで残る何かを創ります」
力強い言葉。今まで聞いてきた全ての人の全ての人の言葉の中で、一番強い。
「――でまぁ、そのためには日々勉強です。ただ何かを造っているだけでは限界があるので、こうやって色んな所でインプットを、って、ね」
「それじゃあ、今日もそうなの？」
自分はおまけ、なのだろうか。
「一割……すいません、三割くらいは。――でも今日は先輩が一番です」
四季は小さく笑って頬を掻く。だが、恥ずかしいのは舞夜もだっ

た。四季はあまりにも自然に照れくさい台詞を言う癖があるらしい。パタパタと頬を手で仰ぐ。
俯いて目を閉じ、ふう、と息を吐き出す。ゆっくりと目を開けて四季を見やる。
「どうして私な――」
「――あ、注文来ましたよ」
ちょうどいい具合に遮られてしまい、核心部分を訊く事はできなかった。

美術館に行った日の翌日の放課後、舞夜の教室にやってきた四季は言った。
「今日は街に出ましょうか」
一瞬の躊躇の後、舞夜は頷いた。
昨日が楽しかったからである。
そう、吃驚するくらい楽しかったのだ。
この絵は色使いがどうだとか、顔料は何を使用しているだとか、歴史的な背景はこうであるだとか。まるで素養の無い分野の知識は――だからこそ水を吸うスポンジのように舞夜の中に吸い込まれていく。
これまで舞夜が歩いてきた道は非常に偏っている。分かってはいたのだが、それを改めて実感した。
話はダ・ヴィンチから飛んで、天才と呼ばれる者たちの苦悩、大衆の無理解に広がったりもした。文芸、音楽も含め、類稀な才を持つ者は常人とはまるで異なる人生を辿っている。
大きすぎる才能を持つ者は孤独を避ける事はできない。自身を理解できる人間はあまりにも少なく、短い人生の内に出会える確率はあまりに低い。
舞夜もそう思った。
時折、四季自身の話も混じった。幼い頃から絵筆を取り、土を与

えられる。芸術家である父の背中を見て育った四季にとっては、それは自然な事だったそうだ。
御先が言っていた通り、舞夜と四季は似たような背景を持っているようだ。舞夜が影の部分を歩いて来て、四季は日のあたる道を歩いてきた、本当に、ただそれだけの違いしかないとも思えた。
「それじゃ行きましょうか」
だから舞夜は四季の背中を追う。

「雨の中を歩かせちゃってすみません」
四季は苦笑する。
「大丈夫」
今降っているのは小さな雨粒なので、出歩くのにそう不都合は無い。
「先輩は雨は好きですか？」
「嫌いではない、って感じかな。あんまり酷いのは流石に嫌だけど」
二人はゆっくりと歩く。それぞれが持つ傘の半径分だけの距離が今の二人の間にはある。
「僕は結構好きです。雨音って、どこか音楽みたいで」
「音楽？」
四季は、はい、頷く。
「一粒一粒が独立した音を出し、けれどそれ単体では存在しなくて、多くの他の音と重なり合っている」
今は橋の上だ。眼下を流れる河の水音や、車道を行く車の走行音、時折遠くに聞こえる電車の音など、世界には音が満ちている。
舞夜は立ち止まり目を閉じた。
それぞれの音に耳を澄ますと、一つ一つの音がクリアになり、それ以外の音がバックに回る。集中を下げて全体を受け入れると、一つの混在した流れに聞こえる。
心地良い音の奔流。
世界には途切れる事無く音が存在している――

と、パシャ、という異音が聞こえた。驚いて目を開けると、
「あの……綾瀬川くん？　何をしているの？」
「写真撮影」
四季の手にはカメラがあった。本格的な一眼レフ等ではなく、小さなデジカメだ。
「どうして撮っているの？」
「綺麗だったから」
かっと頬が火照った気がして慌てて眼を逸らす。
「いつも持ち歩いてるんですよ。どこに何があるか分からないですし、もちろん自分の目に焼き付けてはおきましたけど、客観的なものも残しておきたいので」
「勝手に撮らないで」
「作られた表情は好きじゃありません。――それに言ったら撮らせてくれたんですか？」
「いや」
パシャ。
「ちょっと！」
そう叫んで四季を見ると、カメラが向けられているのは舞夜ではなく、遙か遠い鈍色の空だった。次いで、流量の増えた河の遠景、いつもとは違う暗さを持った街並み、と続く。僅かに目を細めた引き締まった表情。
舞夜は嘆息した。
「これも勉強？」
「勉強ですよ。ただ、勿論嫌々やってる訳じゃありません。好きでしてる事ですけど」
「その全てが糧となる、か」
「はい」
舞夜はもう一度目を瞑って世界に耳を傾けた。

それから。
ほとんど毎日のように四季は舞夜に会いに来た。舞夜は四季に導かれるように様々な場所に行き、多くのものを知った。
雨の匂いも風の音も、夜の色も月光の暖かさも、変わり行く街の表情でさえも。
四季が用事がある時には、独りで何処かへと出掛けたり、友人と出掛けたりもした。
まるでそれまでの生活の分を取り戻すかのように。

「綾瀬川くん。昔の音楽家がなぜ作曲に力を入れたのか、知ってる？」
楽譜展に行った帰り道、舞夜は言った。
「当時は録音技術というものが存在しなくて、自分という存在を後世にも伝えるには、譜面に残すしかなかったの。だから、彼等は譜面に自身をのせた」
四季は静かに聞いている。
「彼等は、認められたかったのかもしれない。一括りにする事は出来ないけど、現代にまで残る芸術を生み出した人達は、きっと何かが欠けていた。足りないものを埋める様に何かを創ったのかもしれない――」
……自分に言い聞かせてるみたいだな、と舞夜は思った。
「綾瀬川くん。あなたの作品が見てみたい」

休日の校内は静寂が降り積もっている。舞夜の足音だけが響いている。
「失礼します」
美術室に入ると――四季がいた。
絵の具に塗れた白衣を纏い、ペインティングナイフでキャンバス

を引っ掻いている。舞夜を見向きもせず、画筆を取っては色を重ね、気に入らないと見るや削り直し、傍から見ると単調なその作業を飽きる事無く延々と繰り返している。
そこに声を掛けるタイミングなど存在しなかった。
そして、舞夜も声をかける余裕などなかった。
――その絵には、風が見えた。
降り注ぐ雨音が、流れ行く河の音が聞こえた。
二人で最初に街へ向かった時の光景だというのは分かる。けれど、舞夜が見たものとは当然違う。デジタルに記録された世界でもない。
ここに描かれているのは『四季が見た』世界だった。
この人には、一体どんな風に世界が見えているんだろう。
一心不乱に描き続けるその背中に舞夜は声に出さずに問い掛けた。
……やがて、四季の動きが止まる。脱力して息を吐いた。
「ねぇ、四季」
初めて名前で呼んだ。四季はゆっくりと舞夜に向き直る。
「なんですか、舞夜さん」
四季も名前を呼んだ。舞夜がここにいる事に気付いていたのだろうか。
いや、そんな事はどうでもいい。
「あなたは……凄いね」
呆気に取られたように四季は目を見開いている。
「私は、美術は全然分からないけど――この絵は好き」
そう言って微笑むと、四季は頭を掻いて照れたように笑った。本当に嬉しそうに笑った。
それは無邪気な笑みで、いつも見せる微笑みとは違っていた。
「ありがとう、舞夜さん。でも――」
四季は舞夜を真っ直ぐに見つめた。
「――僕も、あなたのピアノが好きですよ」

久しぶりにピアノ――自分の演奏を聴いてみよう。
そう思ったのは四季の絵を見て――そして四季が、舞夜の演奏が好きだと言ってくれたからだ。
きっと今ならもう、心が潰れそうになったりはしない。
ピアノへの想いが薄れたのだろうか？
それは分からない。そうなのかもしれないし、全然そうじゃないのかもしれない。
自室のラックを眺め、目についたものを手に取ると――舞夜の最初のＣＤだった。
「綺麗、だよね」
深い夜の海、或いは夜空の色。
貴志川沙耶。
当時中学生の彼女は『音の見える少女』と称されていた。
そして舞夜との合作となるこのＣＤは中学生同士という事で話題となり、普段はクラシックを手に取る事の無い層にまで売れた。
彼女も今は高校生だろうか、長らくＣＤを出していない舞夜とは違って、彼女がデザインを担当したＣＤは今でも発売されている。
まるで演奏をそのまま表しているかのようだ。彼女の担当した作品はそう評され、固有のファンも付いているらしい。
強いな……、と素直に感嘆する。
きっと謂れの無い批判を受ける事もあっただろう。重箱の隅を突くような文句を言われたりする事も、実態部分以外に非難が及んだ事すらもあったかもしれない。
それでも彼女は折れていない。自分の音を見失い前に進めなくなった舞夜とは違い、曲がらず歪まず立ち止まらず、彼女は強く前に進んでいる。
彼女に会えていたら何かが違っていたのだろうか？
今も舞夜はピアノを弾き続けていただろうか？
翌日、舞夜は言った。

「共感覚って知ってる？」
四季はグラスをテーブルに置く。
「黄色い声、真っ赤な嘘、冷たい音。一般化するなら『ある刺激に対して通常の感覚のみならず異なる種類の感覚をも生じさせる特殊な知覚現象』ってとこですか。文字や数字に色を感じたり、音に色を感じたり、味に形を感じたり」
舞夜は膨れる。
「なんで知ってるのよ。……前から思ってたけど、四季って生意気だよね」
「……前から思ってたんですか」
複雑そうに苦笑する四季。
「ダ・ヴィンチやフランツ・リスト、ランボーにムンク。こういった人達は何らかの共感覚を持っていた、とされています。まぁ、本当かどうかはわかりませんけど。――そうですね……たとえば、僕は『舞夜』はすごく綺麗だと思います」
「は？」
あまりにも唐突なその言葉に、素っ頓狂な声をあげる。四季は喉を鳴らすように笑う。
「えーっと、『舞夜』という名前、その字、そして響きが綺麗――あぁ、もちろん本人も綺麗ですよ」
「うるさい」

今朝の天気予報では晴れだったのだが、残念ながら雨は急に降り出した。
「思いっきり降ってきたね」
舞夜と四季は駅ビルへと逃げ込んでいた。外を見ると大粒の雨が鈍い音を立てながら降り注いでいる。
「四季、大丈夫？」
濡れた四季のワイシャツは絞れてしまいそうだ。

「ごめんね」
「大丈夫ですよ。夏服の女の子を雨に濡らす訳にはいかないですし」
四季は苦笑した。この時期の習慣でバッグに入ったままだった四季の折り畳み傘のおかげで、舞夜は濡れずに済んだのだ。
「やっぱり一緒に入るべきだったよ」
「でもその傘じゃ小さすぎるし、それじゃあ結局二人とも濡れてましたよ」
「うん……」
「でも、今日はもう帰りましょうか。止みそうにないですし」
仕方ないね、と舞夜は頷いたが、内心では不思議に思っていた。四季から解散を申し出るのは珍しいな、と。たいてい舞夜から言うのだが、ここ最近は四季からも多くなっていた。
もしかして、仕事が忙しいのかな？
四季は不定期ではあるが月に数本程度の仕事が入る事があると言っていた。大丈夫なのか、と聞いてみても大丈夫だとしか答えなかったが、もしかしたら忙しかったのかもしれない。
「四季……、ごめんね」
「……何の事かは分からないけど、謝らなくて良い事だったら謝るのはやめてって言ったよね？」
「お仕事、忙しいんじゃないの？」
「……まぁ、最近はちょっと」
「だったら、やっぱりごめんなさ――」
「違うって、やっぱりこれは謝る事じゃない。舞夜と一緒にいるのは僕が好きでしてる事なんだから、ね？」
舞夜は頷いた。
「それじゃ、また明日」

君のいない転調　―ｍｏｄｕｌａｔｉｏｎ―

翌日の放課後、いつものように舞夜は教室で四季を待っていた。
遅いな……
不意に零れ落ちたその言葉に頬が熱くなる。落ち着こうとして頭を振り、パタパタと手で顔を仰ぐ。
あっという間だったな……
美術館に行って語られて、街中を連れ回されて映画を見て。
知らないものを沢山見て、初めての事を山ほど経験した。
友人と遊ぶ事もあったし、独りでどこかに出かけたりもした。
それは、十七年間生きてきて初めての事ばかりだった。
すごく楽しくて信じられない程に幸せで、きっと平凡と呼ばれるだろう日常がこんなにも満ち足りたものだという事を初めて知った。
……そして、これほど長い間ピアノから離れたのも初めてだった。
梅雨の終わりも近付き、四季と出会ってからもうすぐ一ヶ月が過ぎようとしている。
窓の外にはグラウンドが見える。昨日降った雨は既に乾き、部活動の楽しげな笑い声が響いていた。
私も昔はそうだったのかな……
幼い頃—小学生にもなっていない舞夜が母親と連弾していた頃が一番楽しかった。毎日新しい曲を覚えて、母親に褒められて抱き締められて、父親は笑って頭を撫でてくれて。それは遠い幸せの記憶だった。
いつから楽しさよりも辛さが勝るようになってしまったのだろう。
片手で数えられる年齢からコンクールに出場し始め、その全てで認められてきた。様々な課題が与えられ、その全てを弾きこなしてきた。
やがて、精密な演奏から『氷の指先』と、繊細な音色から『硝子のタッチ』と称されるようになり、目新しさに食い付いてきたマスコミに取り上げられてCDも出した。
舞夜のピアノだけが一人歩きし、それが広まれば広まる程、当然のように批判も増えていった。

心の通わぬ機械的な演奏。テクニックに溺れて溌剌さが足りない。演奏に新しさが無い。
そんな評論を幾度となく目にした。
その辺りからだろうか。舞夜の演奏に迷いが混じり始めたのは。
そしてそれは如実に表れ、音から透明感が消えた。それはただ譜面通りに弾いているだけ、との評に繋がった。
悔しくて悲しく辛くて泣きそうになっても。舞夜はピアノから離れられなかった。
やがて両親は舞夜に関わろうとしなくなった。
それは、両親が愛していたのは舞夜自身ではなく、才あるピアニスト――ピアノの才能そのものだったのだと知った瞬間だった。
舞夜は空っぽだったのだ。
人生をピアノに捧げてきた少女の内には、もはや何も残っていなかった。
それからはそれまでの惰性、そして諦めきれないという微かな想いで以てピアノに向かってきた。それ以外の生き方を知らなかったから。
でも今はもう違う。四季が新しい世界を見せてくれたから、もう大丈夫。
「本当に遅い……」
来ないのかな、心中で呟く。
メールしようかとも思ったがふと思いついた。今日は舞夜の方から会いに行ってみようと。
バッグを持って立ち上がる。廊下に出ると一列に並んだ窓の外に澄み切った青空が広がっていた。
……夏休みになったら、海に行けるかな？　浴衣を着てお祭りにも行ってみたいかも。そして花火を見て――
階段を軽やかに下りていく。最後をジャンプして着地。
――美術室があった。
四季は美術部なのでもしかしたら荷物でも取りに来ているのかも。

そんな事を考え、ノックしてから中に入る。
幾種もの画材の混じった臭いがする。室内には二人の少女の姿があり、彼女達は突然入ってきた舞夜へと視線を向けた。
「あの、綾瀬川四季くんは――」
その言葉は途中で音を失った。
一枚のキャンバスが、舞夜を惹き付けた。
遥かに遠い蒼。吸い込まれそうに深い透き通った色。
微妙に濃淡を付けながら一枚全部がその色に染まっている。
言葉が出ない。
真に優れた芸術は評価を拒絶すると言われる。これが万人にとってそうかは保証できないが、少なくとも舞夜にとっては限りなく至高に近い。
「綾瀬川くんは、今日は風邪でお休みですよ？」
恐る恐るといった様子で掛けられた声にハッとする。
「え、あぁ、そうなんだ。ハハ……」
茫然とした所を見られた気恥ずかしさを誤魔化すように笑う。
「この絵は誰が描いたの？」
「それは綾瀬川くんです。でも、完成品じゃなくて――というかそれはまだ練習って言ってました」
「そっか」
舞夜が答えると、二人の少女は何かを囁き合った。そして立ち上がり、一人は部屋の奥へと入って行った。残った方の少女が言った。
「あの……月岡さんだよね？」
「そう、だけど」
少女は頷き、奥の部屋へと叫んだ。
「――持ってきて」
訳も分からずにその様子を見ていた舞夜の前に少女が一枚のキャンバスを持ってきた。それを四季が描いた絵の隣に並べる。
「これを見てください」
ほとんど真っ白なキャンバス。そこに描かれているのはまだ下書

きで、一人の少女がピアノを演奏している姿だった。
「この絵はまだ書けないって言ってました。まだ背景の色が見えないからって」
「……」
少女は長い黒髪だった。ピアノは音楽室にあるものだった。
少女は舞夜だった。
キャンバスの端には、小さくサインがしてあった。
Ｓａｙａ．Ｋｉｓｈｉｇａｗａと。
舞夜は二枚をじっと見つめる。
「そっか」

二人にあるお願いをして美術室を後にする。
そのまま保健室に向かうと御先がいた。
「正しい順番は分かった？」

翌日、登校した四季は教室ではなく音楽室へと向かった。
前日に舞夜からメールがあり、可能なら、登校後、音楽室に来て欲しいと伝えられたのだ。簡潔に内容のみが記されたメールだった。
四季はそのメールが来た時点で、一つの終わりを、そして新たな始まりを確信していた。
登校中も高校に近付いた時からずっとピアノが鳴り響いていた。
一ヶ月前に聴いた曲達。それらが僅かな拙さと、確かな意思、柔らかな暖かさを以て奏でられている。
階段を登り切り、部屋の扉に手を掛ける。
そして、曲の終わりを待って、余韻さえも消えてしまってからゆっくりと開いた。
室内に足を踏み入れると、ピアノの前に立つ舞夜と目が合った。
微笑んで拍手をする。

「私はピアノを弾く」

「――四季。あなたのために。――そして、私自身のために」

音楽室の終曲　―ｆｉｎａｌｅ―

舞夜が高校に来る事は無くなった。

四季の生活は舞夜に出会う前に戻った。高校に通って授業を受け、部活動、そしてデザインの仕事に没頭する。そうしている内に時間は瞬く間に過ぎていった。

頭の片隅にはいつも舞夜の事が残っていたが。

そして――

――夏休み前日。

終業式にやってきた舞夜に呼び出され、四季は再び音楽室にいた。もう部活動中の生徒もおらず、校内には静寂が満ちている。職員もほとんど帰宅してしまっているのだろう。

ピアノを眼前において壁に寄り掛かり、四季と舞夜は並んで座っていた。

傾いた太陽から赤い光が差し込んでくる。きっともうすぐ日は落ちてしまう。

話したい事など幾らでもあった筈なのに、聞きたい事など山ほどあったのに、四季は何も言えずにいた。

だがそれは舞夜も同じようで、何度も口を開こうとしてはやめ、そして遂には四季の肩に頭を乗せ、動かなくなってしまった。

やがて――

「――私は、今月で高校を辞めてオーストリアに行く」

舞夜は言った。呟くように――けれど確かな決意を滲ませて。

「十日前くらいかな……初めてコンクールで賞を取った時からずっ

とお世話になってた先生が指導に来てくれてたんだけど、向こうで本格的な指導を受けてみないか、って誘ってくれたの。私の音、凄く変わったって。久しぶりに褒めてくれたの」
「うん」
「やっぱり、私は音楽が好き。ピアノが……大好き」
「うん」
「ちょっと時間は掛かったけど、少しだけ遠回りはしたけれど、四季のおかげで分かったから。私にはピアノが必要だって」
「うん」
「これから先、沢山のものを見て、色々な事を経験して、私だけの音をきっと見つける。私自身の音に辿り着いてみせる」
力強いその言葉。自分の未来を信じ、理想の音を手に入れてみせるという誓い。
その言葉こそ、四季が望んでいたものだった。

「四季の行動はさ、全部もう一度私にピアノを弾かせるためのものだったんでしょ？」
四季を見つめ、舞夜は悪戯っぽく笑う。
「ねえ、四季――いいえ、貴志川沙耶。……あなたは、音が見える」
それは単純なアナグラムだった。
「きっと今のあなたは私以上に私の音を知っている。迷いが滲んでいた事も知っていて、だからこそ、こうやって私に関わってきた――あなたの絵を完成させるために」
Ｙｅｓ
「でもね、私はそれでも良いと思った。だって、どんな道を辿っても私はきっとピアノに戻ってきた。それなら早い方が良い。あなたが関わっている方が良い」
舞夜は四季に微笑む。
「四季。あなたの作品はきっと時を超える。その手助けをするには今の私じゃ力不足。私は、私が認められる私の音を、あなたに描い

て欲しい」
だから私は行くよ、と舞夜は小さく続けた。
「ごめん」
舞夜の耳元で四季は囁いた。
こんな道を選ばせてしまって、ごめん、と。
舞夜は絶対に戻ってくる筈だと言ったが、四季はそうは思わない。
この道はあまりにも険しく、進めば傷だらけになってしまう茨の道だ。
才ある者が選ぶとは限らず、選んだ者が報われるとは限らない。
故に、このまま進んでいたら舞夜は日常に戻っていたかもしれない。
ささやかで平凡で、でも穏やかで幸せな日常を送っていたかもしれない。
そんな可能性を捨てさせたのは、四季の勝手な想いだ。
「ごめん」
舞夜はくすっと笑った。
「なんかいつもとは逆ね。……でも大丈夫。たとえそれが私のためで無くても、過ごした時間は嘘じゃないから。これから先、どんな事が待ち受けていようとも、大丈夫。この道は、私が選んだものなんだから」

「――でもね、ちょっとだけ思うんだ」
不意に舞夜の声が震えた。
「四季とずっと一緒にいたかったなって。普通の高校生みたいに恋をして、一緒に遊んで、ずっと笑っていたかったなって」
それは知ってしまった当たり前の幸せ。
もう叶う事の無い、儚い願い。
「さよならは言わない。終わっちゃうなんて嫌だから」
「ありがとう」

――半年後、留学中の舞夜のもとに一枚の絵が届いた。
そこには限りなく澄んだ、けれど深く暖かな蒼色の中で演奏する少女の姿があった。

月夜にもう一度　―ｄａ　ｃａｐｏ―

「四年ぶり……かな？」
「僕が高校一年の頃だからそれくらい」
「本当にこのピアノで良いの？　私の家にもピアノはあるけど……」
「いいよ。久しぶりの再会は思い出の場所で、ってね」
「うーん……そういうものなの？」
「そういうものなの。それに、これからはいくらでも聴かせてくれるんじゃないの？」
「……そう、ね」
「だから今は――夜想曲をもう一度。今の舞夜の、最高の演奏を」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8087w/

夜想曲をもう一度

2011年9月19日03時31分発行